

2021. 12. 19. 主日礼拝説教
聖書：マタイによる福音書1章18-22節
『その夜の出来事』

「人間には他者への義務だけでなく、自らの中に宿る精神に対する義務がある」と語ったのはトルストイでした。二十世紀初頭、映像文化以前の大衆のヒーローは活字文化の担い手でした。1909年、彼は戦争と軍拡に正義を見出そうとする世界に絶望して家出をします。その途上、小さな駅の駅長室で息を引き取りました。82歳でした。彼の最後の手紙は、南アフリカで差別撤廃運動を行っていたまだ若いガンジーに宛てた次のようなものでした。「あなたの書かれている無抵抗主義の人々のことを知り、喜んでいきます。そこで私の心に生まれた考えをあなたに聞いて頂きたく筆を執りました。それは無抵抗と呼ばれていることは愛の法則に他ならないということです。愛は人間の生活の最高にして唯一の法則であり、このことは誰でも心の奥底に感じていることです。私達は子供の中にそれを一番明瞭に見出します。愛の法則はひとたび抵抗という名のもとでの暴力が認められると無価値となり、そこには権力という法則だけが存在します。ですから私はこの世界の果てと思われるトランスヴァールでのあなたの活動こそ、現在世界で行われているあらゆる活動の中の最も重要なものと信じます。」

今朝与えられました聖書の箇所は馴染みの深いマタイによるクリスマスのお話です。わたしたちも何度となく読み返したことでしょう。マリアとヨセフは婚約中であつたが、マリアは聖霊によって身ごもっていることが明らかになったと印象的な書き出しで始められて行きます。19節で夫ヨセフは「正しい人」であつたと記されています。当時は多くの人がそうであつたように、正しい人というのはただ単に律法を遵守しているとか、あえて律法という約束事を破るという後ろ指を指されたことがないといった程度の柔らかな括りだったことかと思えます。なにも正しい人であるために常日頃から激しい闘いを自分に課していたとは考えにくいのです。今の言葉で表現するなら極めて常識的な人であつたことかでしょう。けれどもヨセフにとってこの度の事件は彼の日常性を遙かに超えたものでした。このことが表沙汰になるとマリアの「いのち」に関わる事へと急転しかねません。ここでヨセフは思いもしなかつた「異なる場への押し出し

れ」に遭遇します。ヨセフは悩みます。なぜなら彼の持つ正しさは何の役にも立たないからです。彼の気づきは「いのちの課題」とは切り捨てるのではなく受け入れることに集約されるということ、つまり自分が変えられていくという決断に立つことでした。

私達も正しさを主張する時、いつも誰かを悪者にして苦痛を押しつけます。けれどもそこには神が共におられると感じる喜びのおとずれはないのです。主の使いはマリアを妻として迎え、その身に起こったことを未解決のままでよいから共に負って生きてゆけと命じました。そして、ヨセフがそのことを決心した時にインマヌエル(神われらと共にいます)という経験をしたのです。

私達は、殊によると浅ましくいじましい正しさなどに縛られたりします。しかし、相手の苦しみに心を傾ける時、自分の精神に対する義務が解き明かされるのではないかと思います。その夜の出来事とは、神ご自身が正しくない私達と共に生きるために、正しくない私達の姿になって来られたということ。これがクリスマスの出来事なのです。